

住商混合地域・中崎町における路地空間の景観特性に関する研究

現代システム科学域・環境システム学類・環境共生科学課程
宮城 絵美理（下村・阿久井ゼミ）

1.研究目的 大阪市北区の中崎町では、周辺の大規模な都市開発と共存しながら、細い路地と長屋が続く昭和の懐かしい街並みを利活用したまちづくりが展開され、地域固有の路地景観を呈している。本研究では、中崎町の路地空間を対象に、景観写真を用いた印象評価実験を通じ、評価に影響を及ぼす物的環境要因について明らかにすることを目的とした。

2.研究方法 本研究では調査対象地の中崎町において、周辺地域を含む土地利用状況や路地空間ごとの景観構成要素の把握を踏まえ、景観写真を用いた印象評価実験及び解析を行い、路地空間の景観特性について考察した。調査対象地は、中崎町の中心部であり、長屋と路地からなる空間が確認できるエリアに定めた。まず、調査対象地及び周辺地域における土地利用等の把握を行った。次に、調査対象地において 25 路地を抽出し、令和 3 年 7 月 5 日に路地の両端部から中心に向かって、それぞれ 1 枚ずつ計 50 枚の景観写真を撮影し、各路地の幅員、沿道の土地利用状況等の路地概要、画面構成要素及び画面構成率から、物的環境特性を捉えた。さらに、25 路地の景観写真を用いて、本学域の学生計 50 名を被験者に、14 対の形容詞対を用いた SD 法による印象評価実験を実施した。解析では 25 路地に対する印象評価の平均評価点を算出して基礎データを作成した。そして、これらのデータに主成分分析を適用し、クラスター分析による類型化を踏まえ、路地空間の景観特性を探った。

3.解析結果及び考察 【土地利用状況】中崎町西部に位置する梅田等の市街地においては現在施工中の「うめきた 2 期地区開発プロジェクト」をはじめ、大規模な景観更新が行われている。一方、調査対象地の路地空間は、住居と店舗がそれぞれ約半数の割合で存在し、路地の約 7 割が幅員 4m 以下であることから、住商の用途が混在し、狭小な路地で構成されていることが示された。【印象評価特性】印象評価実験を踏まえた主成分分析の結果から、

14 対の評価項目の主成分負荷量を用いて第 1 主成分を「賑わい性」、第 2 主成分を「生活文化性」と解釈した。次いで、25 路地の主成分得点を用いて 2 次元布置図を作成した上で、クラスター分析を行い、タイプ A、B、C、D の 4 タイプに類型化した。そして、これらの類型化の結果と各景観写真の画面構成率の関係を分析した（図 1）。「A：賑わい性が高いタイプ」は 7 景（No.12、No.14、No.18、No.19、No.22、No.23、No.24）が該当し、沿道店舗率が

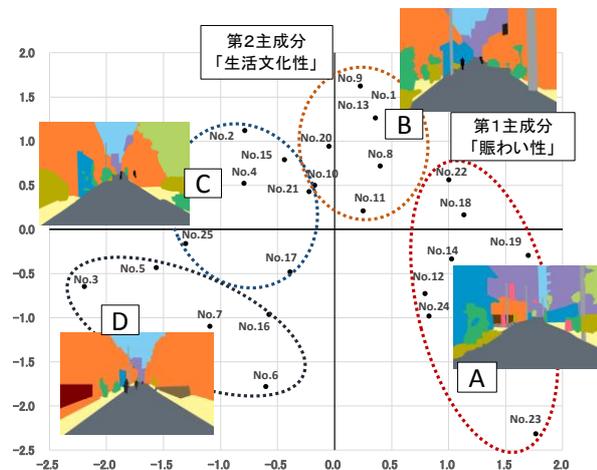


図 1 景観写真の主成分得点布置図

61%と平均より 19%高いことが示された。また、景観構成要素を見ると、緑・看板を含む道路占用物が4タイプの中で最も多く、平均より4%高く、店舗も4タイプの中で最も多く、平均より6%高いという特徴が示された。「B：生活文化性が高いタイプ」は7景(No.1、No.8、No.9、No.10、No.11、No.13、No.20)が該当し、クラスター分析において特異な景であるとされたNo.20を除き、傾向を分析すると、沿道の土地利用に関して特徴は見られないが、景観構成要素を見ると、道路占用物が4タイプの中で最も多く、平均より1%高いことが示された。「C：賑わい性が低く、生活文化性が中程度のタイプ」は6景(No.2、No.4、No.15、No.17、No.21、No.25)が該当し、沿道住居率が77%と平均より19%高く、景観構成要素を見ると、緑が4タイプの中で最も多く、平均より2%高く、店舗は4タイプの中で最も少なく、平均より5%低いという特徴が示された。「D：賑わい性・生活文化性が共に低いタイプ」は5景(No.3、No.5、No.6、No.7、No.16)が該当し、沿道住居率が83%と平均より25%高く、景観構成要素を見ると、緑・看板・道路占用物がそれぞれ4タイプの中で最も少なく、合計は平均より8%低いという特徴が見られた。特に緑は平均の2割以下であった。

4.中崎町の景観特性 本研究においては、印象評価実験を通じた主成分分析の結果を用いて各路地空間を「賑わい性」と「生活文化性」の2軸によって分類したが、2軸の評価がともに高い景はなかった。しかし、類型化した各タイプの特徴を見ると、住商の用途が混在しながらも、賑わい性を感じる景と生活文化性を感じる景が存在していることから、この重層性が地域らしさを形づくっていると考える。また、印象評価における「賑わい性」には、店舗及びファサードの表出、「生活文化性」には道路占用物と住居の表出が最も多く起因し、両者の評価が低い景は特に緑の表出が少ないという特徴が見られた。また、2軸の評価がどちらも低いとされる路地空間では、比較的沿道における店舗としての土地利用が少なく、近隣の中心市街地である梅田地区から離れた場所に位置する傾向が見られた(図2)。以上の知見を踏まえると、各路地空間の景観特性に応じて、既存の住空間を保全しつつ、適切な店舗配置及びファサードデザインを施すことにより、地域全体の「賑わい性」の創出につなげることができる。また、線的・面的な植栽整備によって「生活文化性」を促進させることで、よりシーケンシャルな景観創出に寄与できることも考えられる。また「D：賑わい性・生活文化性が共に低いタイプ」のような景に対して地域らしさを訴求することが今後の景観更新における手掛りになり得ると考える。さらに、路地空間を基盤とした住商混合地域という特性を活かし、地域住民や沿道店舗の個々の景観づくりの取り組みを汲み取り、明らかになった知見を中崎町らしさの将来像へと波及させることにより、質の高い景観形成が可能と考える。

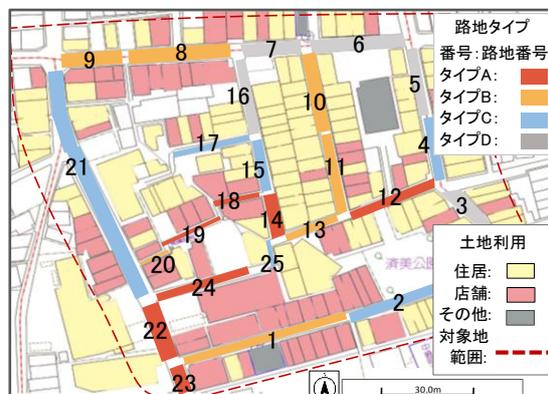


図2 土地利用及び路地分布図